

教員の総合業績(基礎資料)調査 氏名 (沼田 寛)

1 研究業績

1) 著書・論文・学会発表・作品など (平成 12-18 年度に限る)

例: (欧文の場合は、原文 alphabet で記入してください)

全著者あるいは作者名 (自己にアンダーライン、単著の場合はアンダーライン不要)

& 著書、学術論文又は作品の名称

\$ 発行所 (総頁数)、発表雑誌又は発表学会 (号・巻・pp・年月)、展覧会 (場所・期間) などの名称

さらに、特別講演・シンポジウム (招待講演)・一般講演など (地方支部会・全国大会・国際会議) の別

註: 学会・展覧会など、専門分野以外の人に分りにくい場合は、できるだけその社会的位置づけ、歴史、規模などの簡潔な説明を付してください

著書

松原仁、竹内郁雄、沼田寛、「ロボットの情報学」、NTT出版、2001

沼田寛、「続・謎のジャンケン探偵団」、公立はこだて未来大学複雑系コース編『複雑系科学のすすめ』所収、2006.3

沼田寛、「世界を変える時間の文法・関係の文法」、InterCommunication 57、NTT 出版、2006.7

Hiroshi Numata, David L. Wright, Yoshisuke Ueda; “Chaos Media Project—What should be recorded, disseminated and questioned towards the future for our nonlinear studies?”, 電気情報通信学会技術研究報告Vol.106, No.413, 2006.12

研究会発表

沼田寛、BeingとBecoming再考——ハナ・アレントのアウグスティヌス解釈をめぐって、第 8 回札幌複雑系シンポジウム、2002.3

沼田寛, David L. Wright, 上田皖亮、カオス・メディア・プロジェクト——非線形力学の研究の蓄積から、何を記録し、伝え、未来に問いかけるべきか?、電気情報通信学会・非線形問題研究会特別講演、2006.12

作品など

沼田寛、津田一朗、「数学の思考」、現代思想増刊、2000.10

(インタビュアーとして津田一郎<非線形数学の革命>の項を担当)

沼田寛、「自然史と科学を語る達人が残した陽気な遺産」(S.J.グールド『マラケシュの贗化石』書評)、日経サイエンス 3 月号、2006.3

2) 学会活動 (役員・会員)、学会の組織運営、学会誌の編集委員など (平成 12-18 年度に限る)

例:

#学会などの名称

&編集委員長又は委員などの別

\$ 任務期間 (年月)

註：専門分野によっては適宜変更（例えば、学会を展覧会などと記す）・追加説明を付してください できれば展覧会・学会などについても社会的位置付け、歴史、規模などの簡潔な説明を添えてください

2001.11 国際科学ジャーナリスト会議に参加

2004.9 第4回数理水産科学研究会に参加

3) 研究費獲得状況（未来大学外からの財源）（科学研究費、財団助成金、委任経理金など
（平成 12-15 年度に限る）

例：

#平成 12-(13)年度

&財源、たとえば科学研究費補助金

\$ 研究課題名

%代表者、分担者の別、研究課題参加者数、あるいは〇〇研究所との共同研究（相手機関の協同研究者数など）

¥研究経費（例：平成 12 年度；800 千円、平成 13 年度；500 千円）

4) その他（特許、内地研究（学内共同研究は除外）および在外研究歴と成果など特記すべきこと。本項目は平成 12-15 年度に限定しない。）

2 教育業績

1) 教育負担の実態（複数教員で担当する科目の場合は、貴方の分担分のみ）本項目は時間割に含まれた教科（補講・補習など教室で行なったものは含む）を調査の対象としております。従って、〇〇研究会、〇〇同好会など、各教員室他で行なったものは、対象外とします。試験やレポートなどの採点時間も除外します。

例：

科目名（講義・演習・実習・補講の別）、単位数・必修/選択の別、担当教員数（単独の場合は不要）

&実施期間（平成12年度前期、あるいは平成13年10-11月）、実施コマ数（休講しても補講で補えば算定する）、補講をしなかった休講回数（例：実施13コマ、休講2コマ）

\$ 実働時間数（全て、実時間合計(推定)値でお願いします）、演習などは一コマ1.5時間を超えていると思われるので、そのような場合は、たとえば一コマ2.2時間などと算定してください（例：実働22.5時間）

%受講登録学生数（例：45名）、平均的出席者数（例：38名；初めは40名、終りは25名など）、単位認定（合格）者数

註：本項目はできるだけ正確にお願いしたいですが、概数でも結構です 記述がない場合は0と判断します

2000

前期「コミュニケーション論」「複雑系基礎セミナー」

後期「科学史・科学哲学」「複雑系入門」

2001

前期「コミュニケーション論」

後期「科学史・科学哲学」「複雑系入門」

2002

前期「Communication III」「コミュニケーション論」

後期「科学史・科学哲学」「複雑系入門」

2003

前期「コミュニケーション論」「科学史・科学哲学」

後期「複雑系入門」

2004

前期「科学史・科学哲学」「科学技術リテラシ」

後期「コミュニケーション論」「複雑系入門」

2005

前期「科学技術リテラシ」

後期「コミュニケーション論」「科学史・科学哲学」「複雑系入門(旧カリキュラム再履修者のみ)」

2006

前期「科学技術リテラシ」

後期「コミュニケーション論」「科学史・科学哲学」「複雑系入門(旧カリキュラム再履修者のみ)」

(各・実施 15 コマ、受講者数は「コミュニケーション論」「科学史・科学哲学」が平均 100 名程度、「複雑系入門」が 80+100 名程度、「科学技術リテラシ」 250 名)

2) 成績評価方法 (その方法を具体的に記載・学生 (社会) が納得するような具体的説明。) また、複数の教員で担当する科目の場合は、取りまとめの方法についても記述してください。

多くの場合、出席、課題と平常点、期末試験または期末レポートを各 1/3 のウェイトで評価、期末レポートにすることは可能な限り口頭試問を行っている

3) 講義方法など改善への努力 (FD 関連の講演会などの聴講回数、教育内容とそれらの効果について貴方が行われた事柄・目標を具体的に記述して下さい)。

1. できる限り講義メモをプリントとして配布し、そのあと共有フォルダ等に置くようにしている。
2. 板書、パワーポイント、Excel ワークシート、ビデオ、web 等を必要に応じて使い分けることが、ようやくできるようになってきた。
3. 出席確認に、小テスト的な質問に答えてもらう形をとっている。全員に返答はしないが、必要に応じて誤答のパターンを紹介しつつ翌週冒頭に簡単な復習を行っている。
4. 授業中、学生に発言を求めたり、ディスカッションの形式を試みることもあるが、なかなか難しい。何か手を動かして目に見える結果の出る作業(計算なりゲームなり)をしてもらったあとなら、比較的よいレスポンスがあるので、できる限り試みている。

4) その他 (上記以外に特記すべきことがありましたら、簡潔かつ具体的に、箇条書きなどで記述してください。特に、貴方が作られたシラバスと現在教務委員会で検討されている (コース別) 講義内容・目標、あるいは JABEE などとの関連、並びに貴方が担当されている科目の位置付けなどについてご意見があれば記して下さい。また、本学は教員の専門分野が多岐にわたっているため、相互理解を目的としたコース特有の問題点や、皆さんの教育に対する抱負などを記述して戴いても結構です。)

学生の考える力と文章を書く力(和文+英文)が連動しているのは、やはり間違いないと考える(特に、知識とした得たこと、確認できた事実、自分の考察を、区別して書く訓練)。それをリテラシやコミュニケーションの枠内に閉じ込めず、専門的な内容と結びつけてゆくことが重要だし、コース別の教育内容のまとまりを学生が形成するのもにも役立つと考える。

3 大学の管理運営

各種委員会（委員長・委員、クラス担任、学習指導・生活指導、クラブ活動の顧問等の実績（具体的に記述してください、できれば実働延べ時間数など）、その他。

2000-2001: PR 委員、コミュニケーションセンター員

2002: ライブラリ委員、PR 委員、コミュニケーションセンター員、VEP ワーキング G メンバ

2003: ライブラリ委員、パンフレット・ワーキング G メンバ、VEP ワーキング G メンバ

2004: ライブラリ委員、国内国際連携委員会(KKR)交換留学促進・未来館連携担当、VEP ワーキング G メンバ

2005: ライブラリ委員、国内国際連携委員会(KKR)交換留学促進・未来館連携担当、VEP ワーキング G メンバ

2006 国内国際連携委員会(KKR)委員長、VEP ワーキング G メンバ

2000: 1B クラス担任, 2001:2A クラス担任、2002:プロジェクト学生のみ担任、2003-2004: 1C~2C クラス担任, 2005:1C クラス担任, 2006 2C クラス担任

4 その他

資格（技術士など）、地域への貢献（地域自治体審議会、委員会等の役員、委員。地域との共同研究・技術相談。公開講座・出前授業・市民向け講演）あるいは提言・御意見など

2000.12 公開講座「人工生命を作ろう」、青少年のための科学クリスマス・ワークショップ(電気通信学会北海道支部)

2001.6 公立はこだて未来大学公開講座「コミュニケーション・ウィーク」

2001.10 公立はこだて未来大学公開講座「世界の複雑さを表現する数理のコトバ」

2002.6 講演「IT時代の広報・公聴とは?」北海道地区広報・公聴研究集会

2003.10 講演「異文化コミュニケーションから何を学べるか?」函館地裁・家裁合同裁判官研修会

2004.12 未来大・未来館共催のロボット・ワークショップ(公開講座)の企画・実施

2005.3 未来大と未来館の連携に向けてのフォーラムを組織

2005.10 フォーラム「地位に根付くサイエンス・コミュニケーションの創出を」を開催

2006.2 太陽活動のメディア・アート展示「SOL 日本展」を開催(於 2/6-9 公立はこだて未来大学、2/12-19 東京デザインセンター)、"日本におけるドイツ 2005-6"の一環としてゲーテ協会の協賛を得たほか、ロレアル・アート・アンド・サイエンス財団の支援等を得る

2006.4 函館における第1回サイエンスカフェ(学術会議、文部科学省と未来大学の共催)開催をコーディネートとして実現。

2006.9 函館での第2回サイエンスカフェ「私たちの聞きたい捕鯨論争: Whaling Debate for the General Public」を開催(未来大学と函館国際水産・海洋都市構想推進協議会の共催)

2006.11 函館での第3回サイエンスカフェ開催(未来大学生・近藤綾乃の企画による)を支援

大学のコミュニケーション環境にバイリンガルな要素をできるだけ導入するよう、努力している。VEP ワーキング・グループでの活動、国内国際連携委員会での活動を通して、また Connections Café の運営にあたることで、このことを推進している。2004 年度には、初めての英語による本学の案内冊子 The Guide の編集にあたった。また、この年度よりバイリンガルの News Letter 編集にあたっている。

2002 年より、学内での TOEIC/TOFEL テスト実施の支援を行っている。教育的意義が大きいと考え、ほぼ毎回、学生諸君に混ざって実際にテストを受けている。以下は、その結果である。スコアにやや頭打ち傾向もみられるが、目標値として 900 点達成を学生たちに公約しており、その目標は取り下げている。

